レッスン7

A. お祈りの暗唱と暗記

あなたと、数人の子どもが始めのお祈りを唱えてから、子どもたちがレッスン5で暗記し始めたお祈りを復習しましょう。

B. 歌 （前に習った歌を歌うことも含む）

Joy Gives Us Wings

D A D G D
Joy gives us wings to fly, joy gives us wings
D A D A D
Joy gives us wings to fly, joy gives us wings

A D
In times of joy, our strength grows in might
A D
In times of joy, our intellect takes flight

A D
In times of joy, our understanding is bright
D A D A D
Joy gives us wings to fly, joy gives us wings

Dm A7 Dm A7 Dm
But when sadness visits us, when sadness visits us
A Dm A Dm
We become weak, our strength goes away
A Dm A Dm
Our insights are dim, our thoughts become gray
A7
How-ev-er

Joy gives us wings to fly, joy gives us wings
Joy gives us wings to fly, joy gives us wings

In times of joy, our strength grows in might
In times of joy, our intellect takes flight
In times of joy, our understanding is bright
Joy gives us wings to fly, joy gives us wings

C. 引用文の暗記

以下は、このレッスンで子どもたちが暗記する引用文について説明するのに役立つでしょう。これは喜びというテーマに焦点を当てています。

アブドル・バハは、喜びは翼を与え、喜ぶとき私たちはもっと強くなり、幸せなとき物事がもっと早く分かると教えられておられます。喜びは私たちの心の特質です。喜びでいっぱいの心があると、神様の恵みが私たちの周りを取り巻いていることが分かります。優しい両親のめぐみ、友だちの恵み、それから、何よりも、神様のことを知って、神様を愛する恵み。私たちはどんな状況でも幸せで喜んでいて、みんなに喜びを分けてあげなければなりません。アブドル・バハは、子どもたち皆が、すべてのところで喜びの光を放つランプのように輝くよう願っておられます。いつも喜ぶことを思い出すために次の引用文を暗記しましょう。

おお人の子よ！汝（なんじ）われに会い、
わが美（び）を反映するに相応（ふさわ）しくなれるよう汝の心に喜びを持て。[106]

＜汝＞　神様が人間をさす時に使うことば、「あなた」という意味。

＜われ＞ 神様が自分のことをさす時に使われることば、「私」という意味。ですから、「汝われに会い」というのは、「あなたが神様に会い」という意味になる。

＜わが＞　前に習ったように、神様はわたしたちにお話する時、この言葉を「私の」の代わりに使われる。

＜美＞　うつくしさ

1. イラナちゃんのお母さんは空を飛ぶ鳥たちや、咲いている花々、海岸に打ち寄せる波を見るのが好きです。彼女は自然に美を見出します。

2. ときどき、歌の美しさは私たちの胸をうち、涙が出るほどです。

3. ムニル君はお祈りをするとき、いつも、神様のうつくしさや、愛、寛大、英知を思い出します。

＜反映する＞

1. アマリ君は自分が見つけた石を磨いて、それが光を反映するほど輝くようにしました。

2. 純粋な心は神様の属性を反映します。

＜相応(ふさわ)しい＞

1. ショナちゃんは一所懸命、勉強をして、とても良い成績を収めました。先生は彼女が真面目にがんばったことをほめました。ショナちゃんの頑張りは先生がほめるに相応しいものです。

2. デイビッド君はいつも兄弟の面倒をみます。両親はデイビッド君に子どもたちをまかせることができると思います。デイビッド君は両親の信頼に相応しい子です。

＜喜ぶ＞

1. ロナルド君はおじいちゃん、おばあちゃんと遠く離れて住んでいます。学校が休みのとき、おじいちゃんたちのところへ行くと聞いて、彼は心から喜びました。

2. モゼガンちゃんは、畑にきゅうりのタネをまく時、両親を手伝いました。最初の小さなきゅうりができ始めたのを見て、彼女は心から喜びました。

D. お話

以下のストーリーは、アブドル・バハがどのように周りの人々のこころに喜びをもたらされたかを、子どもたちに伝えるものです。

リロイ・アイオアスは有名なバハイでした。みんなはもっと大きくなったら、彼のことをもっと知ることでしょう。アブドル・バハが1912年にシカゴを訪問された時、リロイはまだほんの少年でした。この精神的に純粋な少年がアブドル・バハに会ったときの興奮がどんなものだったか、みんなは想像できますか。ある日、リロイと彼のお父さんが、アブドル・バハの泊まっていらっしゃるホテルへと向かっているとき、リロイにある考えが浮かびました。彼はアブドル・バハにお花を持って行くことにしたのです。彼が持っていたお金はわずかでしたが、白いカーネーションの美しい花束を買うことができました。でも、ホテルに着く頃にリロイの気が変わりました。彼は、アブドル・バハに物質的なものを差し上げない方が良い、たとえ美しいお花であっても、と思いました。彼は自分の心を捧げたかったのです。それは彼が捧げられる最も大事なものでした。それでリロイのお父さんは、誰が持ってきたかを言わないで、そのお花をアブドル・バハに差し上げました。

アブドル・バハは、彼に会うためにホテルに集まってきた大勢の友にお話をされていました。お話の間、リロイはアブドル・バハの足元に静かに座り、アブドル・バハの知恵と愛に満ちた言葉に耳を傾けました。その後、アブドル・バハは立ち上がり、お客さまたちと握手をかわしながら、その一人一人に愛のしるしとして白いカーネーションを一本ずつ渡していかれました。その時、リロイはアブドル・バハの後ろに立って、こう思いました。「ああ、

アブドル・バハが振り向いて、そのお花の一本を私に下さったらいいのになぁ」と。多分、彼は心の中で密(ひそ)かに、実際、この美しい花を持ってきたのは誰か、アブドル・バハに気づいてほしかったのかもしれません。でも、一本また一本と白いカーネーションが他の人に渡されると、もうリロイにはまわってこないように見えました。そのとき、突然、アブドル・バハが振り向いて、リロイを見つめられました。アブドル・バハのお顔は愛で輝いており、その目は優しさに満ち溢れていました。さて皆さん、リロイはアブドル・バハから白いカーネーションをもらったと思いますか。いいえ、アブドル・バハはそれよりももっとすばらしいものをリロイに与えられたのでした。アブドル・バハは上着につけておられた美しい真っ赤なバラを抜き取り、その少年に渡されたのでした。リロイは大喜びでした。結局のところ、アブドル・バハは、誰がその白いカーネーションを持ってきたかご存知だったのです。

E. ゲーム: 竜の尻尾つかみ

子どもたちは一列に並び、後ろの子が前の子の肩か腰に手をかけます。先頭の子は竜の頭で、最後尾の子は尻尾です。尻尾が頭に捕まらないように、必死に左右に動く心構えをします。「始め」という合図があるまで、列は真っ直ぐのままでいます。一人の子が「1、2、3 始め!」と言ったら、頭が尻尾を捕まえようとし、尻尾は逃げようとします。列を崩さないようにして互いに右へ左へと列全体が動きまわります。頭が尻尾を捕まえることができた、または、途中で列がくずれたら、頭が最後尾に着いて、列の二番目の子が頭になります。どの子も一度は頭と尻尾になるようにゲームを続けます。

F. ぬり絵 7

G. 終わりの祈り

おお人の子よ！汝（なんじ）われに会い、
わが美（び）を反映（はんえい）するに相応（ふさわ）しくなれるよう汝の心に喜（よろこ）びを持て。